

## 大平総理と「芳友会」

吉 永 實 雄

大平さんが、池田内閣の官房長官をしておられる時、私はある中小証券の社長をしていた。当時の取引所理事長は、日本銀行副総裁から転出された井上敏夫さんであった。私は井上さんとは日銀時代からのゴルフ友達であり、また、日興證券の吉野さんや日銀の佐々木さん等とよく飲み歩いた仲であった。ある日、大蔵省に出入りしている雑誌社の社長某氏が、大平官房長官と井上理事長との座談会を企画した。井上さんから電話がかかり、「君もぜひ出てくれ」との要請があった。私は「酒やゴルフの付き合いならするが、偉い人と堅い話は苦手だからこ免こうむる」と断ったが、「君も友達甲斐のない奴だ」と、皮肉をいわれるので陪席を承諾した。

ところが、当日の三時間くらい前に井上理事長が、のつびきならぬ用事で急に出席できなくなった。それなら私も当然やめると、雑誌社の社長に連絡したところ、その社長が大変に慌てて、「官房長官を独りにしては何とも申しわけない。ぜひ出席して夕食だけでも一緒にしてもらいたい」と、三拜九拝、平身低頭である。

仕方がないから顔を出すと、大平さんはちゃんと約束の時間に会合の場所にきておられ、恐縮した。いろいろ雑談しているうちに、私と一橋が同窓であることが判り、大平さんはそばをすすり、私はお許しを得て無礼講でお酒を遠慮なく頂戴した。準備もしていなかったもので、その時、どんなことを話したか記憶にないが、大平さんにはお粗末な奴と思われたことと、恥入る次第である。これがご縁で、三菱金属の相京社長（現在相談役）と私が世話役になって、「芳友会」を設立し、時々パレスホテルで大平さんを囲んだ朝飯会を催してきた。この会では

大平さんから政財界の動向や政界の逸話などを披露してもらい、大変楽しい会であった。

大平内閣の姿勢は「信頼と合意」として表現されている。これは大平さんの重厚さ、謙虚さ、待ちの姿勢からきているといわれている。私はもつと掘り下げて、こうした同氏の思想や言動は、同氏の心奥に潜んでいる宗教的なものからにじみ出ているように思われてならない。同氏にはパウロの「贖罪」、親鸞における罪惡深重の凡夫觀や大愚良寛に見る諦觀があるように思われる。実存的自覚から人生の実相に参到すれば、親鸞の「善惡の二つ総じてもて存知せざるなり」との告白のように、われわれのやることは、何が善いか何が悪いか即断のできないのが真実である。大平さんの「アーウー」は、大平さんにとってアーメンであり、念仏と同じではないだろうか。私はこれを、大平さんの「アーウー哲学」と名づけたい。

大平さんが亡くなられてからちょうど満三カ月目の九月十一日（木）に、大平総理の再選に協力された渡辺大蔵大臣と女婿の森田一代議士を招いて、財界の名士約三十名が丸の内パレスホテルで朝食会（芳友会）を開催した。その席上で森田さんから次のような感銘深いご挨拶があった。「昨年の四十日抗争で大平はいかにも権力亡者のように世間でとられ残念に思っていました。これは全くの誤りでありまして、大平の死後、大平の人となりが次第に皆さんに分かっていただいていることを喜んでおります。大平は常々私達には、時期がきて総理を辞めたら代議士も辞めて、自由な一人の市民として読書と好きなゴルフを楽しんで晩年を暮らしたい。そして今日までたいへんお世話になった方々に、お礼とお返しをしたいと思いますので急に亡くなつてこの願いを果たさせてあげられなかったことを、近親の私どもとしては、かえすがえすも残念でなりません。云々」

聖書の言葉を掲げてご冥福をお祈りします。「人の子が栄光を受ける時がきた。一粒の麦、地に落ちて死なずば唯一つにて在らん、もし死なば多くの実を結ぶべし」（ヨハネ、福音書）

（国際商科大学常任理事）